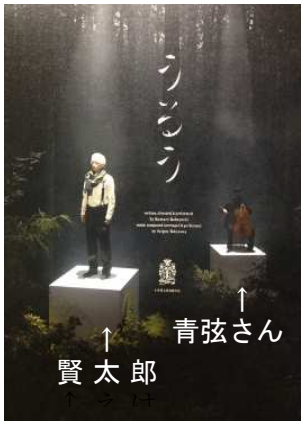
004 TICA

著作	著者	あらすじ・感想
マスカレードホテル	東野圭吾	【待望の新ヒーロー誕生！都内で起きた不可解な連続殺人事件。次の犯行現場は、超一流ホテル・コルテシア東京らしい。殺人を阻止するため、警察は潜入捜査を開始し・・】 東野圭吾作家生活２５周年の三部作が「麒麟の翼」「真夏の方程式」とこれ。「麒麟」が１０だとしたら「真夏」が１で、これが５。 「麒麟の翼」の加賀（阿部寛は鼻につくけど）は冷静でオトナの刑事。それに比べて、‘待望の新ヒーロー’新田はオトナの余裕のある人間として確立されていない。そこを魅力として新田刑事の成長物語になり長期シリーズになっていくのでしょう。 最初、題名の「マスカレードホテル」はホテルの名前かと思っていたら「ホテルコルテシア東京」で繰り広げられる仮面をかぶった人たちの騒動を書いたお話で、宿泊客のひとりずつがストーリーを持ち、推理小説だと思って犯人捜しをしながら読むと軽々と振り回されてしまいます。この本は人間ドラマ枠で読んだほうがよいです。
往復書簡	湊かなえ	【あれは本当に事故だったのだと、私に納得させてください。高校卒業以来十年ぶりに放送部の同級生が集まった地元での結婚式。女子四人のうち一人だけ欠けた千秋は、行方不明だという。そこには五年前の「事故」が影を落としていた。真実を知りたい悦子は、式の後日、事故現場にいたというあずみと静香に手紙を送る―。書簡形式の連作ミステリ】「告白」越えはとうぶん無理。
さだのはなし	さだまさし	若いころは貧相で軟弱で大嫌いだったのに、ＮＨＫの「今夜も生でさだまさし」を見始めてから年をとったわたしと緩さがマッチして、二年前には国技館のコンサートにも行くほどに。以来、順調に「まっさん」路線を走行中。 この本はコンサートのＭＣをまとめたもの。ＭＣ本が出るなんてこの人くらいのもの。泣いたり笑ったりしちゃうので、外では読めない出来上がり。

		２４１頁のステージ写真のバックに徳澤青弦さんがちょこんと写っている。青弦さんは前にも「生さだ」に登場したので親交があるのはわかっていたが、実はこの人はラーメンズの音楽を初期からずっと手がけ、賢太郎の新作「うるう」では賢太郎以外の唯一の出演者となっているお人。 さだまさしが、その青弦さんに権力乱用して賢太郎に逢わせてもらっているのをわたしは知っている。緩い笑いと緻密な笑いが出逢ってどんな話をしたんでしょう。いいなぁ、さだまさし。…ってそこかいっ！
本気で 言いたいことがある	〃	軽快なトークでは伝えきれない課外授業の一冊。さだまさしに道徳の先生になってほしい。小学校の低学年、まだまっさらな心のときに、こんな話を聞くことが出来たらその後の人生さえ変わるんじゃないかと思う。日本の歴史や戦争のこと。おとなになった人が話す優しく強い生き方。「正義」の「義」はすでに正しいという意味が含まれている。わかりきったことを敢えて正しいと重ねて強調する胡散臭さに気づきなさいと教える。もうとっくにおとなになったわたしでもこんな授業を受けたくなる。まっすぐな、口はばったいようなことまで文字にしても素直に受け入れる事が出来るのは、さだまさしが公平で優しく、最後まで付き合うよっていう憂いが伝わるからだと思う。
茨の木	〃	ヴァイオリンの製作者を探しにイギリスに行く話は実話が基になっている。そのせいか、読んでいるときに実話以外の殆どの部分にまでさだまさしが顔を出してくる。 主人公は、父の急死、兄の病気にもけしておろおろしない。わざわざ兄の病気を伝えに飛行機で来たのに、病状を聞いただけでとんぼ返りをする義姉をただ見送り、自分は興味を優先し父の持っていた古いヴァイオリンの製作者を探しにイギリスに行く。イギリスでは無期限に滞在する行動力と経済力があり、女の人を守る男気もあり、勘がよくてスマート。必要とされているだろう日本にいる人に寄り添うことはしないけれど、やらなくちゃいけないことはやってお金だって

		出しちゃうよと遠くから見守るスタンス。 この本は緩くて優しいさだまさしが好きな私をいやな気持ちにさせる。あんた、愚鈍なほど実直でもっと情のある子じゃなかったの！？こんな立派になってあんたのどこを愛せばいいのさ、って小さいころから知ってる隣の息子を叱る下町のおばさんみたいな気持ち。こういう叱り方をするオトナは下町といえども、まぁいない(^_^;) 今度の「生さだ」はアメリカから生放送、大きな会場でやった還暦コンサートのチケットは数分で完売…。 「課長島耕作」が読んでいないうちに「社長島耕作」になったのを知った時もまた同じ。社長かよって。 …わかんない？わかんないよね。きっと。 ま、そんな頑張るほど、あたしゃさだまさしを愛しちゃいないし、島耕作は嫌いだし。 読みが浅いといわれるのはごもっとも。でも小さなことが気になってしまうんですよ。僕の…以下省略。 たくさんの才能を持っている人もいるけれど、本業がいちばんだと思う。さだまさしも本業の喋りがいちばん。…あ、歌ね、歌。
アントキノイノチ	〃	思っていることはしたことと心根は変わらないと父親が息子にいう。「茨の木」を読まなかったらもっと素直にきけたかも。今はちょっと納得がいかない言葉。 話は、孤独死した人が住んでいた家の後片付けという仕事の衝撃が強いわりに、さらりとしている印象であまり残りそうもない。悪役も強さより愚かさが勝ってしまい憎らしさが物足りない。 アントキノイノチって言葉を発見して、ほくそ笑むさだまさしが眼に浮かぶ。
峠うどん物語 ―上下巻	重松　清	よい人ばかりの登場だと飽きて来る。連作だからどこで終わってもいいのに下巻もある。食傷気味で下巻を読み始めたら町医者の話に鼻の奥がつんとした。この話を思いついちゃったから下巻も出したんだ！ 「ALWAYS 三丁目の夕日」みたいな話。あの映画は堤

		真一がいい。ＮＨＫでやった重松清の「とんび」のお父さん役もとてもよかった。堤真一は年をとって二枚目路線から役柄を変えて大成功。「とんび」のお父さんは黒板五郎系のガサツなお父さんで、本だと好きになれなかったけれど、ドラマはよかった。ついでにいえば、端役の小市慢太郎もとってもよかった！
下町ロケット	池井戸潤	「タモリ倶楽部」で京三製作所を特集していた。昔、姉の家に行くと前の道路をこの会社のバスがよく走っていた。社員が５００人足らずの中小企業なのだが、色々な特許を持っており普段何気なく目にしているものを作っているすごい会社だとこのテレビで知った。その放送がちょうどこの本を読んでいた時だったのでとても興味深く見た。 本の方は、ロケット打ち上げ失敗から始まり、打ち上げ成功で終わる。壮大な宇宙の話のようだが舞台は社員が２００人ほどの中小企業。大企業との対決も半官贔屓の日本人が好みそうな展開で進み、まっとうに生きている人たちが不幸になることなく大団円を迎える。 ただ、佃社長のぞんざいな言葉つかいが気になった。ロケット開発をしていた研究者がどの相手にたいしても町工場の親父みたいな話し方をしている。親父が悪いというのではなく、研究者をやめて１０年足らずでそんな話し方をしてしまうものなのかと思った。それとも研究者ってものは世間ずれしてなくて、もともとこんな話し方をしている人たちなのかな？
あの頃のだれか	東野圭吾	今まで単行本に収まっていない短編を集めた本。「わけあり」な話ばかりを集めましたってことを帯に書いてある。開き直りじゃーん。 話の内容にだまされたいのに題名をつける巧さにだまされた。この本の売りは「秘密」の原型の話が載っているということかな。あとは… つまらん！これはつまらんっ！ｂｙ大滝秀治
英雄の書	宮部みゆき	久々の挫折本が宮部みゆきとは！もはやわたしを宮部ファンと呼ばなくて結構（湯川学調に）。 「ＩＣＯ―霧の城」みたいで読みにくい。こういうフ

		ファンタジーというかロールプレイングゲームものは「ドリームバスター」が限界。といっても「ドリームバスター」も次作までの間が空きすぎたので途中で止まったままだけれど…。 図書館から借りて２週間の期限前に返却しました。
チヨ子	〃	４つの短編と１つの中編。 「チヨ子」って題名が怖いだけで、話はちっとも怖くなかった。最後の中編は挫折したばかりの「英雄の書」と同じニオイがした。
ダイイング・アイ	東野圭吾	著者を知らずに読んだらこれが東野圭吾だとわからないんじゃないかな。 オチのつけどころをホラーに持って行ったようなもので、ホラーと呼ぶには浅い。どこが面白いのかわからなかった。こういうのを読むと「マスカレードホテル」はすごく面白いのかもしれないと思ってしまう。
今昔奇怪録	朱雀門出	健ちゃんが何冊か貸してくれた中の一冊。最初はちゃんと読もうと思ったけれど、ほぼ斜め読み。健ちゃんがなんでこれをわたしに読ませようとしたのか、これを読む力がわたしにあると思っているのか…。
もひとつ ま・く・ら	柳家小三治	小三治は志ん朝の粋も枝雀の深さも談志の切なさもない。高田純次から派手さと毒気を抜いて、井上陽水の話し方を１０倍早回しにした感じ。ひょうひょうとした喋りかたの中にたまにプライドが顔を出す。 ついに談志までいなくなった今、この人の古典ならまだ間に合う。
ポニーテール	重松　清	【親が再婚して「新米きょうだい」になった小学四年生のフミと六年生のマキ。二人の心は、近づいたり離れたり、すれ違ったり衝突したり…。「家族」となった二人の少女が過ごした始まりの日々をやさしく見つめる姉妹小説の決定版】 娘の会社の元社長夫人が号泣したと話していたので読んでみた。泣く用意をして読んだけれど、泣くようなところはどっこにもなかった。小学生が主役の話なら「きみのともだち」みたいに、単純にすとんと心に落ちる話の方が好き。

		気になったのは６年生のマキちゃんのこと。再婚を機に物言いや態度が刺々しくなったわけじゃなく、お母さんと二人で暮らしていた時も同じだったようだから、単に表現がへたな扱いにくい女の子という風にまとめちゃいけない気がする。読んでいてこの子はＡＣじゃないのかと思った。お母さんはため息をついてないで相談に行った方がいい。マキちゃんの顔色を見ながら育っている妹のフミちゃんもＡＣの可能性あり。ちなみに「塔のうえのラプンツェル」もＡＣの話という見方もある。
ぼくの メジャースプーン	辻村深月	「ゼロ、ハチ、ゼロ、ナナ」でファンとなり３冊目。（図書館から借りるのでなかなかハカがいかない）最初は、乾くるみと同じメフィスト賞を獲っているから、乾くるみ・石持浅海路線かと思ったけれど、まるで違う。２月２９日生まれというのも気に入ったので、この人を好きな作家に入れることにした。
酔いがさめたら うちへ帰ろう。 	鴨志田譲	【酒はやめられるのか!? 強制入院したアルコール病棟で起こる珍奇な騒動。別れた元妻と子どもたちとの優しい時間。そして、待っていた意外な結末…。情けなくも笑えて切ない脱アル中私小説】 私小説とオブラートにくるんだのは入院患者が出て来るからだろう。「情けなくも笑えて」じゃなく「情けなくて自嘲える」と変えなくちゃ。表紙の顔がすごく気持ち悪い。この役を映画では浅野忠信がやったんじゃ病気の怖さは何も理解されない。マーシーじゃホンモノになっちゃうから、１０キロ痩せてお風呂に一カ月入っていない松本人志というところか。
龍神の雨	道尾秀介	「相棒」を見ていても思うけれど、結果殺さなくてすんだ話がいちばん落ち着きが悪い。だからこの話は、１％の可能性かもしれないけれど、悪い人が犯人であってほしい。「不幸な境遇」に身を置いたときに、まだ底はここじゃなかった、なんて悪い方へ考えて自分を追い込む癖がついてしまう不幸の連鎖は避けたいもんです。

どこから行っても 遠い町	川上弘美	「センセイの鞄」はベスト５に入るほど好きだけれど、他は難解なものが多く川上弘美を読まない時間が長かったが、例によって健ちゃんが貸してくれた何冊かの本の中にあった。 商店街に暮らす人たちの人生。淡白な話なのになにかしっとりしている。例えば「亡くなった妻の浮気相手と暮らす夫」がいる。簡単に書くとこんなつまらない言葉になる関係の三人がなかなか沁み入るのです。
ビブリア古書堂の 事件手帖 ―栞子さんと 奇妙な客人たち 	三上　延	表紙のイラストどおりの繊細で可愛い感じと古書店店主というミスマッチさや、ふだんはおどおどしているのに、本の話だけは生き生きする栞子さんが人気者になっていま売れている本。 栞なら普通だけど、栞子―この名前はかなり自分に自信がないとつけられない名前だと思う。親がつけたんだから本人には責任はないけど。光宇宙でぴかちゅうってつけたバカ親に教えてあげたいセンス。 話自体より昔の小説を題材にしている設定が面白い。例によって健ちゃんが貸してくれた本だが、イメージが違いすぎるのでなぜこの本を買ったのか訊いてみたら「古書店の話だから」と。うん、納得。でもほんとは栞子さんが好みなんだと思ってる。ここだけの話。
ビブリア古書堂の 事件手帖 ―栞子さんと 謎めく日常	〃	栞子さんのもじもじがずいぶん解消され、飽きる前にキャラ設定の成長があったのでよかった。話の中で取りあげられている本も知った題名が多かったので、その分、１より興味深く読めた。 「湯呑の載った盆」という漢字が気になって調べたら、物がのるのは「載る」と使うそう。そういえば「搭載される」って言葉があるものね。たいへんお勉強になりました。
ヒトリシズカ	誉田哲也	この著者は初めて。新聞の大きな広告をみたあとで、娘が入院している病院の図書室で見つけたので読んでみた。わかったことはこの人はヒットしたドラマの「ストロベリーナイト」の原作者だから広告が大きかったということ。男たちが章ごとに関わった事件を語っていき、それが一人の女性に結びつきその女性の人

		生が浮かび上がってくる作り。あまりに共感が持てない人間ばかりで、やたら残酷…。入院している人が読んだのを置いて行った本だと思うけれど、病院にはあまり合わないと思われ…。
神様のカルテ	夏川草介	題名からして内容が重いのかと思いきや、すごい軽いタッチなので意外だった。漱石の影響で話し方に癖がある主人公のカタサがライトな雰囲気を醸し出し、それが桜井翔くんにぴったり。最初から翔くんをモデルにしていたとしか思えない。あのときパーマをかけた翔くんの似合わない髪型は変人を表す象徴だったのかと納得。 映画のキャストを調べたら、癒しを与えるおばあさんが加賀まりこでびっくり！おばあさん役っていうのはともかく、癒しのイメージは絶対にないでしょう、小悪魔と呼ばれたやんちゃな人に。
あした咲く蕾	朱川湊人	頭が痛くベッドに入ってこの本を読んだ。「湯呑の月」の姉妹の断絶の理由が弱いし（現実だと思うと大変な問題だけれど話としてはありきたり）「花、散ったあと」の終わり方にもっとひねりが欲しいところ。でも熱が出そうでとろろんとしながら読むには、全体的にふわりとした感じがちょうどよい短編集でした。
陽だまりの偽り	長岡弘樹	いま評判の「傍聞き」の話を友達として帰ったら健ちゃんからその本の作者のこの本が来た。楽しみは取っておいてこちらから読み始めた。 特に印象に残る話はない。最後の話は主人公がわかっていないだけの「謎」をひっぱりすぎ。次の楽しみが減少。

〇ももこのよりぬき絵日記１　　さくらももこ

そうそう、病院に置いてある本はこういう方が合っている。

さくらももこの祖父母は本当は意地悪な人だったので、友蔵じいさんは理想のおじいちゃんにしたと以前エッセーに書いてあった。

この本の登場人物は、ももことヒロシと昔パーマのお母さん。と、ももこの息子。孫がいるんだからそれなりの年齢なのはわかるけれど、アニメと同じ顔のヒロシが入れ歯をしているというのはヒロシファンのわたしには軽い衝撃。

○　海街 diary　１～４巻　　吉田秋生

前から面白いと聞いていた漫画も病院の図書室にあった。

父は家族を捨て再婚し、母もまた家を出て行き、育ててくれた祖母も亡くなり鎌倉の古い家に住む三姉妹。あるとき父が亡くなったと連絡が入る。姉妹というのは当たり前に年齢が違うので持っている想い出の量も違い、親に対する思いも変わって来る。

父の死に涙を流すほどの想い出を持たない下の妹二人は旅行気分で東北での告別式に参列し、仕事で欠席と思われた長女は遅れて参列した。そこにいたのは父の二度目の相手との間に出来た娘すずと、三度目の妻とその小さな息子たちー。姉妹はすずを引き取り鎌倉で４人の生活が始まるー。そこまでが１巻。

２巻ですずちゃんが主役になったのを残念に思ったが、３巻でそれにも慣れた。病室なのに、つい笑い声をたててしまい娘に睨まれながら読んだ。そういう面白さは全編にあったが、やっぱり圧倒的に１巻が好き。

人間関係が小さくまとまりすぎていて話の展開もわかってしまうと入院中の娘は言っていたが、この漫画の面白さはそこを補ってあまりある。

会話が秀逸。３姉妹の距離の置き方や関わりあい方。それから懐かしい鎌倉の風景。例えば、海岸線と並行して走る江ノ電、海に続く信号、砂浜へ降りる階段、極楽寺の駅―などなど、写真を見ているような気持ちで読んでいたわたしと娘とじゃ想い出の量が違うから、その辺の温度差は仕方ないね。

「カリフォルニア物語」「バナナフィッシュ」「吉祥天女」より「桜の園」が好きなわたしは、いっぺんでこの話がお気に入りになった。

吉田秋生がこんなに会話がうまい人だと初めて知った気がする。